

主 題：見捨てられた救い主

聖書箇所：マルコの福音書 14章 53-72 節

祭司長・長老・律法学者たちから差し向けられた群集によって、イエスは捕らえられます。捕らえられたイエスは、はじめにカヤパのしゅうとアンナスの所に連れて来られるのです。このアンナスは紀元 6-15 年の間大祭司でした。彼は自分の息子たちを大祭司にするためにローマに働きかけるような抜け目のない人物でした。マルコ 11：15～を見ると、宮の中ではいけにえの鳩の売り買い、また通貨の両替が行なわれていました。これらの商売に大祭司は影響を及ぼしており、許可を与えることや、手数料などによって私腹を肥やしていたのです。

イエスは次にアンナスの所からカヤパの所へと送られます。ここから二つのことを学びます。

1. カヤパでのイエスのさばき 53-65 節

ここに五つの出来事を見ます。

- (1) 死刑にするための証拠さがしをしています。→彼らには見つからないので彼らは偽証しました。
- (2) 大祭司の尋問→マタイ 26：63 には大祭司はイエスに神に誓わせようとしています。
- (3) イエスの返答→62 節「わたしは、それです。」と。
- (4) 大祭司の反応→63 節「自分の衣を引き裂いて…」
- (5) 大祭司・議会の決定→ユダヤ議会には制限がありました。ローマの属国であったため、有罪の決定はできませんでした。告訴の準備だけが許されていました。

これらのことから教えられることを見てゆきましょう。

◎ユダヤ議会のメンバーは大変な罪を犯しています。

彼らには人々の霊的リーダーであることが求められていましたが、カヤパは霊的ではなく、政治的リーダーでした。ヨハネ 11：47 にはラザロの復活後、議会が召集されたことが書かれています。48 節「ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」とあります。これが彼らの関心ごとであったのです。彼らはユダヤが平穏であることに執心していました。もし、なにか暴動でも起こるならローマ人に自分たちの自由が奪われるからです。続いて 49-50 節にカヤパの答があります。「あなたがたは全然何もわかっていない。ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が滅びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」と。カヤパはイエスを殺せば良いのだと言っているのです。51-52 節をみると、神はカヤパが政治家として発言したことをも許されていることがわかります。神は悪をも制する主権者です。53 節、カヤパはイエスを殺そうと計画したとあります。神はカヤパを用いてご自分の計画をなされるのです。

◎彼ら(祭司長・長老・律法学者)の悪

以上の出来事はユダヤ教のきまりにことごとく反しています。

- (1) 集まりは神殿の中庭でとなっていますが、カヤパの家でしたから有効ではありません。
- (2) 法廷は夜間は開きません。
- (3) 大きな祭の期間はさけました。
- (4) 証拠あつめは個別に。
- (5) 証拠は一致すること。
- (6) 死刑は一夜置くことになっています。
- (7) 有罪とする尋問はしてはいけない。
- (8) 証言は 2, 3 人の証言が一致すること。

マルコ 14：62 にはイエスの答があります。「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」と問われたことに対して言われたことです。「わたしは、それです。…」と。彼らはやっと証拠を見つけました。イエスへのねたみ、憎しみが彼らをここまでにしたのです。

◎イエスが誰であるかを明らかにしています。

- (1) イエスには全く罪がありませんでした。
- (2) イエスはキリストでした。それは、
 - 1) 無言によって、61 節、「イエスは黙ったままで、…」、これはイザヤ 53：7「彼は苦しんだが、口を開かない。」とあるとおりです。イエスは身代わりとなって死ぬために来られたのです。

2) 返答によって、61 節に大祭司の問いかけがあります。「ほむべき方」とは神の表現として用いています。それに対してイエスは 62 節「わたしは、それです。」と明確に YES と答えておられます。「人の子」とはこの地上に王国を築く約束の救い主です。これは詩篇 110、ダニエル書 7 章に書かれています。「神であるわたしはさばきのために再び来る」と。イエスはこの預言の人物だといっています。

3) これらを聞いていた人々の反応によって、イエスが自分をメシヤとしたことを人々はよく理解しました。そのため 63 節、大祭司は「自分の衣を引き裂いた」のです。イエスが自分を「神である」と言ったからです。65 節、「ある人々は、イエスにつばきをかけ」ました。これは拒絶、侮辱をあらわす行為です。イエスがメシヤであると告白したために、もしそれが本当なら…とイエスを試すのです。イザヤ 11:1,2 「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」とありますが、メシヤはこのように特別の知識、力をもつとし、イエスを試みるのです。これらは、イエスが神であると表明したことによって、大祭司以下人々の正当な反応であったのです。

2. ペテロの否定 66-72 節

大祭司の女中の問いかけをはぐらかし、ペテロは三度主を否定します。68 節の最初の否定のあと鶏が鳴きました。69 節の女中は 66 節にある女中と同じ人ですが、それに対しても 70 節「打ち消した」とあります。これは何度も何度も否定することです。マタイ 26:73 にはペテロがガリラヤの方言を話すとあります。71 節、ペテロは「のろいをかけて誓い始め」ます。神をのろったのではないのです。自分のいったことが偽りならば、自分にのろいがかかっても良いという決心なのです。ペテロはイエスを愛していたのです。72 節、ペテロはイエスのおことばを思い出して、泣き出したのです。ルカ 22:61 には「主が振り向いてペテロをみつめられた。」とあります。

⇒私たちは忠実に歩むこと、そして、神を愛することは神の命令を守ること、を学ぶべきです。神のために何を捧げるのか、です。

イエスはこのように孤独のうちに十字架へと進んでゆかれます。愛する者たちから見捨てられて……。